

---

# 異世界日記

ヴィス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界日記

### 【Nコード】

N5105Y

### 【作者名】

ヴェイス

### 【あらすじ】

次代の仮面ライダーキバになった関 茜は突如先代仮面ライダーキバの紅 渡に呼び出される。その内容は異世界を救ってくれとのこと。しかし、ただ異世界を救うのではなく、茜にたくさんのベルトと写真が渡される。写真の人にこのベルトを渡せと渡が言う。彼は一体どの世界に行くのだろうか……

## キャッスルドランで異世界へGO!! (前書き)

始めましての方は初めまして、またお前か！ って方はおはようございます。おバカなヴィスをお許しください。

## キャツスルドランで異世界へGO!!

とある日、1人の少年は運動のためランニングへ行こうと家を出る。青年はいつも回っているコースを走り、いつもの公園で筋トレをしている。

彼の名前は関<sup>せき</sup>茜<sup>アカネ</sup>。髪は白く、右目が黄色で左目が赤い虹彩異色の持ち主だ。そして彼の正体は……

「キサマがキバか」

「……ファンガイア」

1体の怪物はファンガイアと呼ばれる。茜は動揺もせず、コウモリ型の機械を呼ぶ。

「キバット」

キバットと呼ばれたコウモリは茜の腕を噛み付き、機械音が鳴り響く。機械音と共に茜の腰にベルトが現れる。茜が「変身」と叫ぶと、キバットをベルトに付ける。

「茜、キバツて行くぜ」

「りょーかい！」

「ぬけぬけと僕の前に現れやがって……死んで後悔しろ！」

2回ほどパンチをするが、体を反らし避ける。それにムカついてファンガイアは回し蹴りをし、キバを吹き飛ばす。そろそろ決めると

キバットが言う。茜は腰にある赤い笛をキバットに差し込み押す。

「ウェイクアップ!」

キバットが叫ぶと周りが暗くなり、茜は右足を上に上げ高くジャンプ。

「てりゃあああああ!!!」

ファンガイアめがけてキックする。キバの紋章が現れ爆発。

茜はすぐに茶色の笛をキバットに差し込むと、「キャツスルドラン!」とキバットが叫ぶ。頭上を見るとかなりでかいドラゴンが上を飛んでいる。あれがキャツスルドラン。キャツスルドランは大きな口を開けて、先ほど倒したファンガイアの魂を飲み込む。キャツスルドランの主食はファンガイアの魂、俗に言うケルベロスだ。

茜は、ふう、とため息を漏らすとキャツスルドランに乗り込む。茜曰く、ここは落ち着くらしい。

数日後、茜は先代のキバ、紅 渡に呼び出される。

「どうしたんですか? いきなり呼び出したりして」

「実は君に頼みごとがあるんだ、いいかな?」

「何ですか?」

言いつらいことなのか、渡は黙り込む。キバットがどうしたんだ? と言つと、とんでもないことを言う。

「異世界を救ってくれないかな?」

異世界、つまりこの世界とは違う……いわゆるパラレルワールドだ。なぜ、彼がそんなことをしないとイケないのか、疑問を残すが、渡はあるものを茜に渡す。それは何個ものベルトだ。茜は察し、これを使って世界を救え、と答えるが、実際は違った。渡はこのベルトを写真の人に渡してくれ、と写真を渡される。

「さあ、行ってくれるね」

数秒黙り込んで、はいと答える。色々な困難があるにも関わらず……

キャッスルドランで異世界へGO!! (後書き)

やってしまったあ、とどうどうやってしまったであります。

だつてえ、全然ポイント上がらないから2次でやってみようと思っ  
たんだもん!

## 登場人物

名前：関 せき 茜 アカネ

年齢：17歳

身長：192cm

体重：87kg

容態：白い髪をしていて、右目が黄色、左目が赤の虹彩異色を持つ

出身世界：仮面ライダーキバの世界

所持ベルト：クウガとアギト以外平成ライダーのベルトは所持 本来のライダーは仮面ライダーキバで戦う

仲間：キバット、キャットスルドラン、ガルさん（ガルルセイバー）、ドツちゃん（ドツガハンマー）、バシャー（バツシャーマグナム）

趣味・特技：トレーニング

好きな食べ物：ラーメン、餃子

嫌いな食べ物：梅干し

### 備考

関家は代々ヤクザの家で、この地域ではかなり有名なヤクザ。しかし、次の跡取りを息子に譲るにも、息子が猛反対し、家を出る。そ

の時、渡と出会い、次代の仮面ライダーキバになったのだ。

慣れないものは無理にでも使うと大変なことになる

最初の世界は何やら建物が並んでいる。どうやらここは都会のようだ。早速近くの人に声を掛けてみるとする茜、この世界を知るにはそれが一番いいだろうと思う茜。

「あの、すみません」

茶髪の子に声を掛けてみた。はい、と振り向く女性にここはどこだと、訪ねてみる。女性はここは海鳴市と言う。それだけわかれば十分、と言って去っていく茜。

キバットは何がわかったのかさっぱりだ。

キャットスルドランに戻ると、マシンキバーに乗る。

「おい、どこにいくつもりだよ」

「ここは海鳴市……つまり、ここに俺が求めるライダーがいるはず」

「んなこと言っても、そのライダーがいる場所はわかってんのか？」

「だからこうやってマシンキバーで探すんだよ」

アクセルを蒸かしてキャットスルドランから勢いよく出る。探してから何十分かたった。茜は聖祥と言う学校に着く。ここに何かを感じる、そう言ってマシンキバーを止める。

「くくっ、これでヤツを倒せる」

不気味な笑いをした男が黒いものを持っている。危ない、瞬時にそ

の男を取り押さえる。

「離せ！ 俺はヤツを見返さなきゃならないんだ！」

「とりあえずその黒いものを捨てる！」

「嫌だ……嫌だああ……！」

何かの拍子にスイッチを押してしまった。スイッチを押した瞬間男がファンガイアみたくなった。

「違う、これはファンガイアじゃない」

あのスイッチが邪気を放っていると推測した茜はキバットを呼ぶ。

「キバット」

「よっしゃ、キバットて行くぜ」

茜の腕に噛み付き、電子音になる。

「変身」

キバットをベルトに付ける。キバの登場だ。

「何だお前……」

「フツーは自分から名乗るもんだけど、まあいいや。俺の名前は仮面ライダーキバ。それだけで覚えとけ」

「仮面ライダー……キバ……殺し甲斐があるな」

「言ってる」

「俺は単なるゾディアーツだ」

ゾディアーツ……仮面ライダーフォーゼに登場する怪物だ。

「聞いたことない名だが、相手にとって不足なし、全力で行くぞ」

ジリジリと互いに動く。緊張の瞬間、先に動き出したのはゾディアーツだ。ゾディアーツの動きは今まで戦ってきたファンガイアよりも遙かに早い。

「コイツ……」

「どうした、キバとやらはそんなに弱いモンなのか？」

やられる、その言葉が何回も頭をよぎる。

「茜、一旦引いて作戦を立て直すんだ。このままじゃやられちゃう」  
「！」

キバットの言うとおりだ。このままここにいたって殴られ損、しかし茜は……

「いんや、俺はコイツを倒す」

その言葉にキバットは茜の眼を見る。ホンキの眼だと確信したキバットはガルルセイバーのフェッスルを吹かせるように指示する。

「ガルルセイバー！」

フエッスルを吹かせると、狼の遠吠えが聞え、左手にガルルセイバーが装備される。

「よっしゃ、ガルさんキバツて行くよ！」

ガシン、ガシンとゾディアーツの腹部に攻撃。しかし、何も効かない。

「おいおい、マジかよ」

「何だ？ そんなもんか？ だったら今度はこっちの番だ！」

羽を飛ばし、茜の足に当たる。深く奥に刺さり、かなりの出血がしている。危険と察知したキバツは一度キャツスルドランへと戻る。何なんだよあの強さ。下手したらファンガイアより強いんじゃないか？ そんな考えをしている時、あるベルトが光り始める。それはフォーゼドライバーであった。

「そうか、この世界のライダーはフォーゼということか」

「でもよ茜、今の俺らじゃ無理だぜ」

「無理じゃない、可能性が0パーセントじゃない限り俺は戦い続ける」

そう言ってフォーゼドライバーを持って先ほどのゾディアーツのところまで行く。

「ふん、性懲りもなくまた来たか」

「悪いな、俺は諦めが悪いんだ」

ラストワン

スイッチの形状が変わる。

変わった瞬間邪気がスイッチから漂う。

「やめろ！ スイッチを押すな！」

時すでに遅し、スイッチを押してしまった。

「俺は……最強だ」

「仕方ない」

腰にフォーゼドライバーを付けて4つスイッチを下に下げる。

3  
2  
1

左手をガッツにする。

「変身！」

レバーを引くと電子音が鳴り響き、右手を空にかざす。

「これは……」

キバットがビツクリする。それはそうだろう、話には聞いていたが、実際に見るのは初めてだ。

「宇宙キターー!」

大きく両腕を上げ、テンションマックスで叫ぶ。続けて茜は「タイマン張らせてもらっぜ」と言っつてゾディアーツに突っ込む。

「たあ!」

ドストスとゾディアーツにパンチ。だが……

「強くなつたが……まだまだだ」

「そんな……まだ足りないのかよ!」

「茜! スイッチを使え!」

キバットがオレンジのスイッチを指す。

「よし」

オレンジのスイッチを押すと、右手にロケットが装備される。装備されたと同時にロケットで、ゾディアーツめがけて突撃。

「は、離せ!」

「嫌だね!」

そのまま急降下して地面にぶつける。やはり茜には使いこなせない、

そう思ったとき。さっきまでいたゾディアーツが消える。

「逃がしたか」

「やっぱり茜じゃ無理だ」

諦めて、マシンキバーで追い掛けようとしたとき、1人の女性が近づいてくる。

「お前は……」

慣れないものは無理にでも使うと大変なことになる（後書き）

突如現れた女性の正体、一体誰なのだろうか……？

## キバとフォーゼVSファンガイアとゾディアーツのタッグバトル

「お前は……」

突如茜の前に現れた女性、彼女は一体何なのか……？

女性は茜の前に立つと、不思議そうに見ている。当然だ、朝からこんなところにいるなんて不信者か何かに思われるのもうなずける。しかし、茜は女性の姿を見てどこかであったような気がする。

「あつ、思い出した！ お前、アリサ・バニングスだろ！」

「な、何で私の名前知ってるのよ！」

そう、彼女はアリサ・バニングス、渡から貰った写真の人だ。そうと分かれば茜は話を仮面ライダーの話題に持ち出す。

「ごめん、少し……そうだ、君仮面ライダーって信じる？」

「仮面ライダーって、あの特撮の？ 信じるわけないじゃない」

それはそうだ、仮面ライダーなんてテレビの中で活躍している戦士だから、信じるなんてまず無理だ。そんな話題をしていたらゾディアーツが現れる。しかも、ゾディアーツだけでなくファンガイアもだ。

「くっ、こんな時に……っ！」

「か、怪物……」

「キバット」

「よっしゃ、キバツて行くぜ。ガブツ」

茜の腕に噛み付き、電子音が流れる。

「変身」

ベルトにキバットを装着。

「ほ、ホントにいたんだ。仮面ライダー……」

茜が攻撃しようとしたとき、青い髪をした女性がアリサのところに近づく。彼女はアリサの友人らしく、かなり親しい。

「えっ、仮面ライダー？ 本物？」

興味津々のように茜に近づく。ファンガイアとゾディアーツは躊躇なく女性を狙ってくる。危ない、そう言って近づいてきた女性を守り、回し蹴りでファンガイアとゾディアーツを蹴り飛ばす。

「あ、ありがとう」

「礼はいい、早く逃げたほうが身のためだ」

「ううん、私仮面ライダー大好きですから大丈夫です」

「そうじゃない、これは君の知っている作り物じゃない、危険だと言っている」

「あのファンガイアは……キバさん、ドツガフォームになってあそこを中心部を叩いて」

何か知っているかのように的確にアドバイスをする。キバットは「そうか」とうなずく。茜は何もわからないまま、紫のフェッスルをキバットに差し込み、ドツガハンマーを呼び出す。

「ドツガハンマー！」

キバットのコールにより、キャッスルドランからドツガハンマーを呼び出す。

「あれ？ フォーゼは？」

「ん」

茜に訪ね、その茜はアリサを指す。それにビックリする2人、無理はない、何にも知らされていないのだから。

「わ、私が仮面ライダー！？ ちょっと、何ふざけてるのよ！ 私そんなの聞いてない！」

「ああ、言っていないからね。んで、ライダーになるの？ ならないの？」

「私は……」

しばらくの沈黙、その沈黙の間に茜はファンガイア&ゾディアーツとバトル、一方アリサはいきなりの要求に戸惑う。『私に出来るの？』『何で私？』そんな考えをしているうちに茜はボロボロな状態。

もう、立つのが限界、そこまで来ている。

さすがの茜もファンガイア&ゾディアーツとの2対1のバトルは厳しい。しかも、あの彼女の言うとおりの場所に最大の一撃を打ち込もうとしてもゾディアーツが邪魔をする。そしてやっとアリサは決断した。

「……………やってやるわよ」

「バニングス……………」

「ねえ、あんたの名前は？」

いきなり名前を聞いてくる。アリサの名前は知っているのに茜の名前は知らない、連携を取るには名前を聞いてくるのが一番とアリサが言う。

「茜、関 茜だ」

「へえ、可愛らしい名前じゃない」

「うるせえ」

「喋っている程余裕があるとは……………なめやがって」

一体のファンガイアが襲い掛かってくる。空気が読めないファンガイアはパンチを2発、キック1発を繰り出すが、防御が上がったキバには効かない。

「なにっ!?!?」

「悪いな、俺あんまり加減とやらが出来ないんだ。あとKYなヤツは一番キライ」

「キサマあ……」

「茜、そろそろ決めるぞ」

「オツケー」

キバットの言うとおり、茜はドツガハンマーをキバットに噛み付かせる。

「ドツガバイト！」

紫電走る朧月の浮かぶ闇夜を作り出し、ドツガハンマーにあるトゥルーアイから強烈な魔王力を発して敵の動きを止め、天に掲げて落雷のエネルギーを集中し拳型のオーラを出現させ、それを振り回してファンガイアを粉碎する。

「私だつて……」

「アリサちゃん！ ロケットとドリルモジュールを使って！」

「すずか……よし」

彼女が言うと、アリサはオレンジと黄色のスイッチを押す。すると茜みたくロケットで空に上がり、左足に装備されたドリルモジュールで敵をめがける。そしてアリサはもう一度腰のレバーを引っ張る。

リミットブレイク

「ロケットドリルキーク!!!!!!」

ロケットモジュールの力で飛翔し、狙いを定めた上でロケットモジュールの勢いを載せ強化されたドリルキークを叩き込む。

倒れたゾディアーツはなくなり、ゾディアーツスイッチが出てきてスイッチをオフにする。

「ふう」

「お疲れさま」

「なかなか疲れるわね」

お互いに変身を解いて握手する。さらにアリサは友人を紹介をしてくれるらしい。そう、仮面ライダー好きの月村すずかである。

「初めまして、月村すずかです」

「初めまして、関茜だ。よろしく」

すずかにも握手する。それから茜はキャッスルドランに戻り、これからどうするか考える。

「で、結局どうすんだ？ せっかく仲良くなったのに早くも別世界に行く、なんて言わないよなあ？」

「ああ、しばらくはこの世界にとどまるよ」

「そうかい」

管理局に……キターーーー!!!

「……待った」

「ダメよ、これで何回目だと思ってるのよ」

ある日の夕方、キャッスルドラン内で茜とアリサは将棋をしている。今のところ勝っているのはアリサだ。天才高校生に勝つ統べはない。一方ずかば別部屋で道具を一式出して何やら作っている。かなり高度な技術で何かを作っているが、茜とアリサは全く知らない。すずか曰く、完成するまで部屋を開けないでとドアにデカく張りつけてある。途中で見てしまったらどこかのおとぎ話みたくなりそうで恐ろしい。

「はい、王手」

「弱いなあ、茜は」

「いや、将棋でアリサに勝つなんて、息を吹き掛けないでロウソクを消すように難しい」

「例えが分かりづらいし意味分からないわよ」

そんな談笑をしていると、キバットがアリサに一番聞きかかったことを聞き出す。

「なあ、2人は高校生なのに勉強しなくていいのか？ もうすぐ受験だろ？」

「あゝ、私達もう大学決まってるから勉強しなくていいのよ、それに私達にはゾディアーツやファンガイアを倒さなくちゃいけないのよ？ 勉強どころじゃないわ」

肩が疲れたのか、肩を回しながらキバットの質問に答える。

その質問にビックリした茜は口をパクパクと動かしている。何せ彼は高校中退するハメになったからなのだ。それに茜も1つ気になることがある。

「えっ、てか、俺と同じ年!？」

「そうよ、て言うかあんたは学校とか行かないの？」

学校とか行かないの、その質問は茜に対するトラウマでもある。実は茜はある暴力事件で退学になったのだ。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

「？」

突然、頭を痛くなる茜。スゴい頭痛に襲われるが、すぐに治る。大丈夫？ とアリサが茜に聞くが、茜は大丈夫、と言って少し横になる。

「茜、ファンガイアだ」

「分かった」

「私も行くわ」

茜、アリサ、キバットはファンガイアとゾディアーツのところに行く。着くと、ゾディアーツとファンガイアがいなくて、去ったあとだ。しかも何かと荒らされている。

「ひどい……」

「ああ、これは許されることじゃない。それに……」

何かの砲撃したあとが気になる。茜とアリサは何なのか調べるべく、バガミールで写真を撮る。キャッスルドランに戻り、何の砲撃か調べる。結果を出すには数時間、最悪もつと時間が必要だ。

「あつ、なのはからメール」

「なのは？ 誰だ？」

「高町なのは、私とすずかの幼なじみ。そして……魔導師」

魔導師と言う単語にビククリする茜とキバット。実際に魔導師を見たことがないキバットと茜には信じがたい話だ。だが、アリサは嘘をつかない人、紛れもない真実を訴えている目をしていて。さすがの茜とキバットは女の子を疑うことなんて出来ない。

「つつてもよう、実際目に見てみないと分からないぜ」

「でも、アリサが嘘をつくはずないし……」

「ねえ、キャッスルドランって空間を越えていけるのよね？ なら、

なのは達が働いている場所へ行けないかしら？」

その問いに問題点が幾つかある。まず一つ、キャツスルドランは時空を越えていけるが、何度も何度も続けて異世界を渡り歩けない。2つ、異世界に行ったら体に支障が出る可能性がある。だから無闇に異世界を行ったり出来ない。

しかし、アリサの答えは誰にも予想できぬ答えであった。

「あのねえ、私は仮面ライダーなのよ？　そう簡単に支障が出たら名がしたる。違う？」

返答に困る。実際アリサは丈夫。しかし、女の子と男の子とは体の造りが違うワケで、平気かどうかなんて根性論だ。

「でも、例えアリサがよくてもすすすが……」

「でもでもってうるさいわね、すすかがそんな弱い子に見える？」

少なくとも、ずっと一緒にいた私から見ればすすかは弱くはないわ」

「……分かった、だが、もしヤバくなったらすぐに言えよ、近くの異世界に緊急移行するから」

キャツスルドランに乗って約19時間、目的の世界にやってきた。

その世界の名はミッドチルダ、魔法使いがたくさんいる場所だ。近未来的な感じがすると茜が言う。

「さて、降りますか……の前にすすかは何？」

「まだあの部屋、そろそろ出来るって言ってたわよ」

「よっしや〜、キバツて行くぜ〜」

アクセルをふかし、茜とアリサはマシンキバーに乗り、地上に降りる。茜曰く、空から地上に降りるのは実にキモチいいらしい。

「キヤーー!! 落ちる〜!!」

1人を残しては……

「ちょっと! 安全運転してよ!」

「振り落とされないように!」

マシンキバーで地上に降り、かなりのスピードで降りてくるから慣れていないと恐怖が襲い掛かる。  
うまくマシンキバーを地上に降りれた。

「もう! 安全運転してよね!」

「すまんすまん」

茜が謝っていると、1人の女性が近づく。髪は茶色でポニーテールをしている。

「やっぱりアリサちゃんだ!」

「なのは!」

2人は抱き合い、嬉しいように飛び跳ねる。

「でも、何でこんなところまで？ それにこの人……」

「ああ、それはね、この人がここまで連れてきてくれたの」

アリサはそう言って茜を紹介する。茜も紹介され、挨拶をする。

「まあまあ、こんなところで立ち話もなんだから管理局においでよ」

「えっ？ いいの？ なのは」

「にやはは、多分大丈夫だよ」

心配だ、アリサと茜とキバットはそう思い、本当に大丈夫なのかもう一度聞いてみる。何度聞いても答えは1つだ。

管理局内に入り、なのはは茜達をソファアに座らせた。

「あれ？ すずかちゃんは？」

「いつもの癖よ」

アリサの質問にああ、と思い出したかのようにうなずく。なのははフェイトとはやてを呼び出し、改めて茜と紹介される。

「へえ、アリサが言っていたとおり外人みたいだね」

「うんうん、めちゃくちゃカッコいいよね！」

「せやな、背も高くて……いいとこどりやん」

3人は茜を褒めて、その茜は頬を紅く染めながら照れている。

「何デレてんのよ!」

ガツンと脳天をグーで叩く。痛えと叫んでゴロゴロと転がっていく。

「だらしないわねえ」

その時のなのは達は茜に同情していたのは内緒である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5105y/>

---

異世界日記

2011年11月20日21時43分発行